

分すら消し去ってしまふほど逃亡を続ける中年の姿は、大きなものを相手にしたときの抵抗の仕方の一つを示していると言えるだろう。逃亡し切るこそが勝利なのである。

「良医」論

教養学部大学院研究生

白井澄世

交尾中のハリネズミがかみ殺した雌蛇の牙に足を刺された夜、女房と一夜のお楽しみ、そのおかげで淫毒が体にまわり後三日の命になってしまった―もし、現代に生きる人がこう言われたら、信じられないどころか一種のお伽噺のように感じるだろう。ましてや、偶然が重なって再び交尾中のハリネズミの雄の針で足を刺し、膿を出した後、浮萍草と金絲荷葉の水の中に半時浸したために治ったなんて、あまりにも非科学的すぎる。

だが、莫言が描き出した「良医」の世界は、このような東洋医学の神秘が現実支配する世界である。この治療法は、私に、魯迅が少年時代に体験した漢方医の医療を思い出させた。「冬にとれた蘆の根」だの「三年霜にあたった砂糖きび」だの「つがいのコロギ」だのを、当時の名医から要求された魯迅は、必死になって集めるが、容易に手に入らない。そうこうするうちに父親は死んでしまう。魯迅は非科学的な漢方医学はペテンであるとして、近代的な医学を学ぶ道へ進んだと言う（『呐喊』自序）。つまり、「良医」の世界はお伽噺ではなく、中国の歴史上―それも最近まで（小説の設定は民国期）―事実存在した世界なのだ。だが、莫言は、漢方医を否定していない。「父の話」によって、漢方医学の「聖人たち」を再現させ、自由自在に活躍させている。その上、道教の道士や神仙を思わせる（呂洞賓・李鉄拐と同格！）名医陳抱缺を「神医」と崇めるような、当時の人々のリアルな感情を描き出したのである。李一把、大咬人はその点まだまだだと語る「父」は、近代的な価値観など持たず、「俗界を超越」して「陰陽五行・宮

衛氣血・絡絡壺の道理」をわきまえることを尊ぶ。「語り」によって完結している世界は「父」の現実であり、現在の読者が介入する余地はない（実際、物語の中で病氣は治る）。読者は「父の話」を通して過去のリアルな感情に触れ、過去の出来事を相対化し、客観的に見ることになる。その上、「時代が進むと共に、良い医者は少なくなり、特に最近数年間では、良い医者ほんのすこしになってしまった」という、「父」―過去から―の現在へのさりげない批判も、読者は可笑しく思いながらも、すんなりと受け入れてしまうだろう。ここに、「父の話」によって再現された世界が、現在の読者に働きかける力がある。莫言は、当時の人々の心理や感情を、当時の人間の現実として描きだした。同時に、現在の近代的な世界に対してチクつと皮肉るしかけが見て取れるのである。莫言は、不合理な（と考えられている）伝統的世界を全面否定するのではなく、かといって逆に、反・反伝統（＝保守）として伝統的世界を肯定しているのではない。これまでの伝統に対する態度と一線を画している。つまり、作者と「伝統的世界」との距離を見て取ることができるのである。

中国の近代は、伝統との対決なしに語ることはできない。五四新文化運動は、旧文化の否定、社会倫理体系としての儒教の否定であり、現中国共産党政権はその発展を継承するものとして存在してきた。しかし、文化大革命を経て、北京の春、第二次天安門事件と、民主化への要求が高まる運動が相次ぐ中で、莫言はあえて伝統世界（それも中国の農民）を描き出している。伝統社会のリアリティを現代から再構築して描き出そうという莫言の試みは、どのような意味を持つのだろうか。私はこう考える。中国の近代化が、伝統的社会・文化を否定し、葬り去ることによって進められてきたこと、また、それら中国の伝統的固有文化は否定するだけのものではないことを、莫言は示したのではないだろうか。つまり、自分たちの文化的根源と存在意義を、現代社会よりも深いところから改めて問おうとする姿勢が、うかがえるのである。それはいきおい、近代化を推し進める現政権や現代社会への問いかけにもなる。中国の文化の方向はこれでいいのか、中国の政治は、本当にこれで正しいのかという懐疑を抱かせる問いである。同時に、こ

のような伝統的共同体である農村を、「近代化」させるという名目で抑圧してきた現政権への批判ともなりうるのではないだろうか。ゆえに、「父の語り」によって現代に再現された農民のリアリティは、近代化過程の批判だけではなく、現在も否定され抑圧されている農村共同体が現実存在していることの主張にもなりうるように、私は思う。「良医」は、数ページの短編ながら、お伽噺のようなおかしさを持ち、読者に不可思議な読後感を与える。それは、この短編が、読者に過去へのノスタルジーを呼び起こすとともに、現在への懐疑を抱かせる構造と力を有しているからではないだろうか。たつた数ページの短編さえもが、「小粒ながらびりりと辛い」という山椒のようなシビアさを秘めつつ、ユーモラスである文章に、私は、作家莫言の力を感じないではいられなかった。

「ちらば故郷」をめぐって

教養学部文科三類一年

横田 智史

この作品は短編集「鹿城物語」のうちの小品であり内容も台湾独自の土着的な…と括られるような話ではないので、すんなりと抵抗感もなく読み進むことが出来、また私自身が主人公達と似たような境遇にいるためか物語と読み進む私の距離は弥が上にも縮まるのであるが、このような読み方は未熟であろうか、まあ若輩者の特権と云うことで許してもらいたいものだ。そう、あの姉さんの手紙において絶えず揺れ続けているカメラのフレームと同じ仕方私の目に映る世界も揺れ震むばかりであり、何某かの都合の良い物語に自らを溶かし込みその中でせめてもの精神的な安定を得たいと半ば無意識に思ってしまうのである。このような私の態度は彼女が「女の子とその小さな姉さんが門前の石段に座っています」という一句とそれにまつわる些細なエピソードに拘ることとそう変わらないものだと思う。双方ともそこに自らの要求を十全に満たすものがない、つまり「私達」が抱えているアイデンティティの揺らぎ（喪